

実は嬉しさでいっぱいなのでした。みんなはタバコをくわえてマッチをすったり、楽器をケースへ入れたりしていました。ホールでは、まだパチパチ拍手が鳴っています。それどころではなくなりいよいよそれが更に高くなって、何だか怖いような手がつけられないような音になりました。大きな白いリボンを胸につけ

た司会者が入ってきました。「アンコールの拍手がおきていますが、何か短いものでも演奏してやってくださいませんか」すると楽長がキッとなつて答えました。「いけませんな。こういう大物のあとへ何を出したってこっちの気の済むようにはいくものでないんです」「では楽長さんが出で、少しあいさつしてください

いませんか。」「ダメだ
おいゴーシュ君、何か出
て、ひいてやってくれ」
「私がですか。」ゴーシ
ュはあっけにとられまし
た。「君だ、君だ」ヴァ
イオリンの一番の人もい
きなり顔をあげて言いま
した。「さあ出て行きた
まえ。」楽長が言いました。
みんなもセロを無理
やりゴーシュを持たせて
扉を開けると、いきなり

舞台へゴーシュを押し出ししてしまいました。ゴーシュがその穴のあいたセ口をもって實に困ってしまって舞台へ出ると、みんなはそら見ろというよう一層ひどく手を叩きました。われるような拍手が鳴り響きました。